



関西ハムの祭典

関西アマチュア無線フェスティバル
2016年7月16日 ~ 17日



2016/7/16-17 第21回 関ハムが
開催されました。天気に恵まれ
盛況でした。
来場者数 (主催者発表)
7/16 4,500名
7/17 4,000名
合計 8,500名

写真提供: JA3VWT, JA3AOP



by JA3VWT



J-DINS災害情報ネットワークコーナーで小学生に説明する福井さんと前田さん」
by JA3VWT



福井さん製作のオリジナル可搬型Wires-X基地ノード局」
by JA3VWT



衛星通信デモ中。右手はキーに、左手はドップラー効果で動いていくダウンリンク周波数を追いかけるためダイヤルに。神業です。」
by JA3VWT

久しぶりにJAIGミーティングに参加して

JE3BEQ
宮本 誠一

< 前書き >

今年の第32回JAIGミーティングは、ニュールンベルグから車で約1時間北に位置するエルランゲンで開催された。2012年のケムニッツで開催された第28回以来の久しぶりの参加になった。前回JAIGミーティングの前に訪れたバルセロナで偽警官に囲まれた一人旅の嫌な経験と、歳からくる一種の心細さ等々でヨーロッパを遠く感じるようになり、加えて叔父の入院と退院後のフォローが数ヶ月続いたこともあって、当初参加する考えは念頭に無かった。一方あるきっかけで半年前から50年振りに亡き娘のチェコ製のバイオリンで練習を再開し、ふとクラシック音楽の地ドイツのJAIGミーティングの雰囲気でお土産代わりに弾けたら、皆さんにもサプライズとして喜んで頂けるのではないかと勝手に想像して、突然参加したいという思いが募ってきた。しかし叔父の退院後の回復の目処がなかなか立たなかったので、土壇場でのキャンセルの可能性を含んで参加したいと開催の一ヶ月前に巻岐さんに正式にお話したところ、打診の段階で既に私の意を汲んで手配をしておられ、エリカさんと楽しみにして待っていると頂いて今回の参加が実現した。

< バイオリンの携行 >

最初携行するバイオリンは亡き娘のチェコ製の年代物を予定していたが、数ヶ月前に日本のバイオリニストがドイツで通関の際楽器を押収されて高額の関税を支払わせられたとのニュースを聞いていたので、そんな高価なシロモノではないにしても娘の宝物でもあり通関手続きは嫌なのと運搬時の破損のリスクを考えて自分の安物の日本製を携行した。バイオリンの弓は長さが長いため、全ての航空会社はケースごとの機内持ち込みを認めていない。弓は大型スーツケースの対角に何とか収まるので預け荷物にした。ルフトハンザの機内持ち込みの寸法制限は55(長さ)×40(幅)×23(厚み)cmであるが、バイオリンの長さは2~3cmオーバーする。一々物差しで測ることはしないだろうと、布製の寸法ピッタリのケースに入れ、万一機内持ち込みを拒否されたらスーツケースに入れる2者択一で臨むことにした。



(写真1: スーツケースにバイオリンを収納した状態(結果的には実行しなかった))

チェックインで布ケースのバイオリンの機内持ち込みを打診したところ、全く問題にされなかったので2者択一は機内持ち込みに決まった。問題は機内の格納スペースに収めたバイオリンが後から押し込まれる他人の荷物で圧死する心配である。そのため自分の手荷物を防波堤を築いて守る必要があり、結果的には行きも帰りもまぐり行ったが神経を使い果たしたのは言うまでもない。

< メイドインジャパン スズキのバイオリン >

私の安物のバイオリンは、マサキチ スズキNo.8と銘が打ってある。大学生の時中古楽器店で針金にぶら下がっているのを見て買った。高価なバイオリンはそのような置き方はしない。音は小さく音色ももう一つであったが見てくれはだけは良かったのと安かったのが買ったが、このバイオリンに一度も愛着を感じたことはなく50年間納戸で寝ていた。従って壊れても惜しくないの今回携行することに決め修理に出した。しかし戻ってきて吃驚した。なんと鳴らないバイオリンが鳴るではないか。50年間ひたすら人目に触れる機会を待っていたことを思うとなんと愛おしく、絶対に壊さずに持って帰らねばならない気持ちに変わった。ニュールンベルグの街角で観光バスのステップを降りた瞬間、目の前のショーウィンドウに目が釘付けになった。なんとスズキバイオリンの無人のショーウィンドウがそこにあった。ドイツのバイオリンはイタリア・チェコと並ぶ有名ブランド。そこにスズキが有ること、そして偶然私を歓迎？してくれたこと、私にとっては特筆できる思い出になった。



(写真2: スズキバイオリンのショーウィンドウ)

< せっかくのドイツ、もう一箇所観光一人旅 >

フランクフルトの駅前のホテルに前々泊し、ハイデルベルグの英語ガイド付きバスツアーに参加した。生憎の雨であったが一人旅を満喫できた。

(写真3: 雨のハイデルベルグ観光)



< 出迎え >

一人旅の魅力は別として、見慣れない国で切符を買って目的地にたどりつくのには往々にしてストレスが溜まるが、今回もヨッヘンさん (DL4KBB) がニュールンベルグ空港まで迎えに来てくれた。既にお会いした方で、ジーマンスに勤めておられ日本勤務も経験され日本語が堪能で嬉しい再会であった。アウトバーンを快走してJAIGが開催されるエルランゲンのホテル・ランガウへ運んで頂いた。



(写真4: ヨッヘンさん)



(写真5: ホテルランガウ)



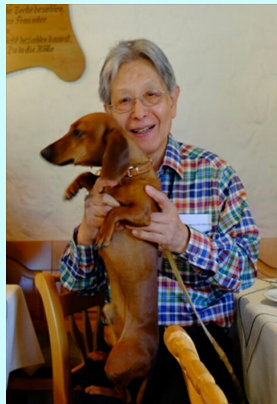
(写真6: エリカさんと壱岐さん)

< 早出組との合流 >

JAIGのような催しに参加するときは、プログラム開始の一日前に会場に到着して早出組と合流歓談し、三々五々到着してくる人達を待ち受けるのが楽しみで何時もそうしている。会場に到着したらエリカさんと愛犬のボボ君を連れてきた壱岐さんが迎えてくれた。そしてレストランでは既に数人のメンバーがビールとお喋りを楽しんでいた。シャワーを浴び着替えて皆の輪に入り、その後カメラを持って一人周辺探索にでかけた。絵本に出てくるような風景は北欧で見掛けるが、エルランゲンは絵画を見ているようで美しい。とにかくドイツは緑が綺麗で多い。何処にいてもベートーベンの交響曲第6番第二楽章が聞こえてくるようだ。日本では美しい田園風景と思ったらすぐゴルフ場が視野に飛び込んできて幻滅するが、ドイツではそんなことはない。そしてその周りの家は廃屋を含めて屋根及び壁の配色が工夫されていて吸い込まれる様な気持ちになる。草原、小川、街並みを飽きることなく写真に収めた。写真は毎年秋の写真展に出すのが目的の一つであり、その作品作りのため最低でも1シーンの撮影に露出を3段階変えて(ブレイク撮影)するため、今回とった写真の総数は2,500枚(実質3分の1の800枚)を超えた。余りに多すぎて未だに整理が出来ていない。

< 願い叶ったユルゲンさん (DL1JAC) との再会 >

2012年のケムニッツで開催されたJAIGミーティングの時、遠く離れたドレスデン空港まで迎えに来てくれたユルゲンさんであるが、その後ミーティングに来られなかったのが感謝の気持ちを伝えることができずずっと気がかりであった。その彼が今回早出組のメンバーの中にいるのに気づき、感激の再会を果たした。彼にアクティブなバンドを質問したところ、そばに持参していた自作のローディングコイル付きマルチバンドのホイップアンテナとモービルリグを繋ぎ、手作りのキーで実際に運用状態にしてくれた。各バンドのSWRは見事に落ちており、ヨーロッパ全域とつい先程まで交信していた手書きログからも快適に動作していることが分かった。



(写真7: ボボ君と壱岐さん)



(写真8: 早出組の人達)



(写真9: 緑の中のランガウの街並)

彼の個性あるHAMの楽しみ方に接して、マンネリ化で目標を失っていた私が刺激を受けたことは言うまでもない。

<観光と得るもの>

一日目はバンベルグの半日観光であった。小ベニスと称され第二次世界大戦を無傷で乗り越えた1000年の歴史の世界遺産都市である。レグニッツ川沿いの美しい水の都を楽しんだ。
 二日目はブランケンのスイスと呼ばれる地方を1日かけて観光した。
 三日目はニュルンベルグ市内を1日かけて観光した。帰国のフライト調整でもう泊するため、夜の一人観光のスポットや食事場所も探しながら…。



(写真10: ローディング部を手にする
 ユルゲンさんと私)



(写真11: ユルゲンさんの自作
 アンテナとHFリグのシステム)

あと何回ドイツに来ることができるかといついつい考えてしまい手当たり次第に記録に残そうとシャッターを切るが何か味気ない。歴史や文化というものは写真に撮るよりも目に焼き付け心に印象として刻むことによってその知識と人生を豊かにするのだと、吉岐さんを見ていて教わった。と言うのは京都や高野山にJAIGのメンバーを案内したとき、専門の説明員の後必ず吉岐さんが分かりやすく正確に又随所に説明員とは違う切り口でフォローされた。それは単なる通訳では無く文化を心で捉えているからこそできるのであると思う。その意味で写真は審美感に因る芸術性以外は記録データでしかないのではないかと思うようになり、整理して事後の活用を期待したところで、どう考えても残して他人に役立つとも思えない。もう一度リセットしたい(大袈裟にはその部分だけ人生をやり直したい)様な気持ちにさえなった。

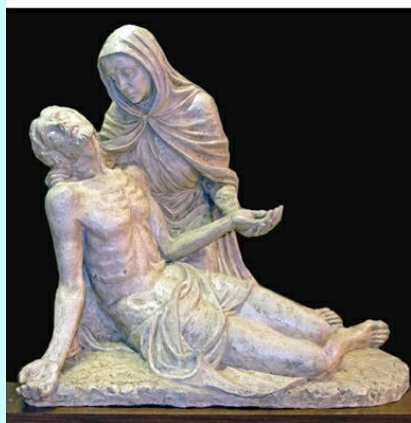
<バス中でのメニューオーダー>

バス観光で目的のレストランに到着して昼食・夕食を取る場合、バスの所要時間によりレストランで待たされたり間に合わなくなって食事ができなくなるのを避けるため、バスの中でメニューを回して注文をと電話でレストランにオーダーしてもらう。これも吉岐さんエリカさんのご配慮である。ドイツ語のメニューを見てもちんぷんかんぷなので、隣席の人が決めるのを聞き見て「それ!」と同じものを注文する。日本だとステーキにするかエビフライにするかあるいは定食にするかと言うような選択になると思うが、ドイツでは例えばソーセージとジャガイモの酸っぱいサラダを選ぶとソーセージは6本にするか9本にするかとメニューは聞いてくる。即ち既成品のメニューとそのバリエーションが共通で多いのではと感じた。日本でエビフライを注文するとき、エビ何個で酸っぱいサラダつきか普通のポテトサラダつきかはその店にお任せの範囲ではないだろうか。期待していたホワイトアスパラはシーズンが既に終わっていてメニューになかったのは残念であったが、当てずっぽうでメニューを注文する旅の食事又楽しい。

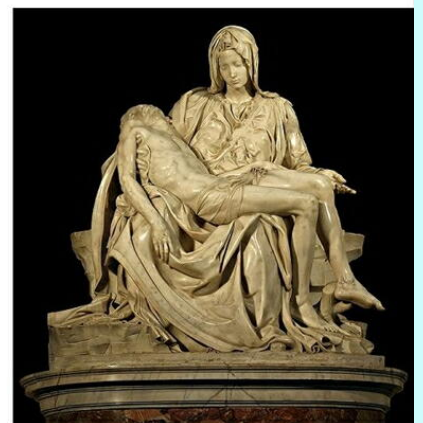


(写真12: ビデオ編集集中に気付いた
 どこかの教会の聖母マリア像)

Pieta



Yoshiko Miyamoto, 1968



Michelangelo, 1499

(写真13: 母の作品(左)とミケランジェロの作品)

<キリストを抱く聖母マリア像>

ドイツの観光にはお城と教会の見学が欠かせない。教会を見学するときは、内部の造り、ステンドグラスや天井の装飾、パイプオルガンと演奏(者)、お祈りに来ている地元の信者の様子、そして全体の雰囲気に興味をそそられる。私はクリスチャンでは無いので、キリストを抱く聖母マリアの像がどの教会にもどこかに飾られていて二つとして同じものはないということを知らなかった。余談ではあるが彫刻家であった私の母が1963年に聖母マリアの像を奈良の統一教会に寄贈し、今も当時と変わらず飾られている。一瞬しまったと思った。ドイツの教会を今まで数々見学してきたのに、なぜ聖母マリアの像に注目してこなかったのか、写真に撮ってこなかったのかと悔やんだ。聖母マリアの像は必ずしも目につくところにあるのでは無く気付かなかったためだが、ドイツの教会は自由に見学させてくれ写真撮影も許可してくれるのでなおさら残念であった。

< JAIGミーティング >

夜のJAIGミーティングにだけ参加するドイツ在住のメンバーも加わって参加者全員が揃ったところで、壱岐さんが声をつまらせてサイレントキーに哀悼の意を表された。JAIGの家族的な絆故なおさら寂しさがこみ上げてくる。その後壱岐さんが第32回のJAIGミーティングの開会を告げられて議事が進行し宴会に移っていった。エリカさんは少し離れた席に座って壱岐さんの司会進行の一言一言にうなずかれるとともに、離れた参加者どこやかにアイコンタクトされていた。今年も盛会に開催できたことにホッとされていたのではないと思う。宴たけなわで私にバトンが回ってきて、50年振りに復活した私のバイオリンを披露するチャンスが来た。オーケストラのカラオケの伴奏でユーモレスクを弾き始めたところ、ホテルのCDプレーヤが読み取りミスを起こし伴奏が消えてしまう。急遽セッティングを手伝ってもらっていた鶴見さん (DJ00Q) に別の曲をセットしてもらって、Souvenir(思い出)を皆さんにプレゼントすることができた。写真を見ると「中断」で緊張していたことを思い出す。その後日本の歌(故郷・浜辺の歌)とドイツの歌(野ばら 歌の翼に)を声高らかに全員で歌った。遠く日本から離れて目を潤ませる人もいた。「歌の翼に」はドイツの人でもすぐに歌える人は少ないそうで、今回は「ムシデン(別れ)」を用意するようことのリクエストも頂戴した。皆さん夜遅くまでビールを飲みながら話は尽きなかった。

< JAIGの魅力 >

今年のJAIGミーティングは32回目の開催で既に四半世紀を超えている。私の最初のJAIG参加歴は2004年の第20回大阪開催で、大阪国際交流センターラジオクラブのメンバーになったの私もお手伝いをした。その後2010年の第26回大阪開催も幹事の一人として再びお世話した。又ドイツでの開催に参加したのは、2006年Berchtesgaden(第22回)、2009年Freiburg(第25回)、2011年Goslar(第27回)、2012年Chemnitz(第28回)そして今回へと続いた。

JAIGは、日本とドイツを中心にその他の国のアマチュア無線家も加わって会員登録数は500人を超え、30年以上に亘って毎年交流し親睦を深め合ってきた。

組織も無く会費の徴収も無いこの集まりは、組織にありがちな気兼ねやしがらみとは無縁で、しかも運営そのものが自己責任のためクリーンで素晴らしい。これもひとえに壱岐さんとエリカさんの献身的なお世話によるもので、心から感謝申し上げます。壱岐さん・エリカさん、この度は誠に有難うございました。

宮本誠一/ JE3BEQ



(写真14? JAIGミーティングの様子)



(写真15: スズキのバイオリンで演奏する私)

アメリカのこぼれ話

JA3USA 島本 正敬

7月の2週間をオレゴンで過ごしました。こんなに長期間アメリカに滞在するのは二十年近くありませんでした。今回もいつものように関空からサンフランシスコまで飛び、そこからオレゴン州のメッドフォードという町までレンタカーを走らせました。サンフランシスコからメッドフォードまでの移動にだけレンタカーを使用するのではなく、滞在中もずっと利用することになったので、オレゴンの家のガレージであくびをしていた2台の車を処分してからもう数年が経ちました。2週間のレンタカーの費用は800ドルを超えますが、それでも頻りに利用しない自動車に所有しているよりトータル費用は大変な節約になります。今日はそのレンタカーの話です。

僕はいつもハーツレンタカーを利用します。ハーツは大手なので他より少し割高なのですが、チェックインで長い列に並ぶことがないこと、サンフランシスコ空港では最も便利な場所にあること等がその理由です。サンフランシスコ空港のハーツには大きな電光掲示板があります。ある方法で予約をして使用開始時間前後にそこに行くと、この掲示板に氏名と番号が表示されています。その番号が自動車が置かれた場所を示しているのです。ですから、ハーツに到着してから一瞬も立ち止まることすらなく自分が借りる自動車までたどりつけ、その車に荷物を積んだら即出発できるのです。駐車場の出口のゲートで免許証と車の確認が行われレンタルの書類が印字されます。この間は1~2分ですから、ハーツに5分もいることはありません。

ここでちょっと余談を。アメリカは合衆国。なぜ合州国と訳されなかったのでしょうか？英語名を直訳すると合州国ですよ。stateは州と訳されますが、本来の意味は国なのです。欧州共同体とアメリカ合衆国と比較すれば良く判ります。EUのドイツ、フランス、イタリア等の国々がアメリカの州と同格と言えるのです。アメリカの州には州の軍隊があり、戦闘機すらあるのです。州により義務教育の期間も異なります。消費税や固定資産税もパーセントの差どころか有無の差すらあります。オレゴンがアメリカで唯一尊厳死を認めた州ですし、マリファナが合法化されている数少ない州。これほど州による違いがあるのです。

同様に自動車の免許制度も州によって異なりますから、オレゴン州の自動車免許はカリフォルニア州では、言わば外国の免許なのです。同様に日本の自動車免許も外国免許。つまり日本の免許で合法的に運転可能ということになります。僕のオレゴンの自動車免許が去年失効してから、米国でも日本の免許で運転をしています。ただ注意しなければいけないことがあります。サンフランシスコのような日本人慣れしているところの大手レンタカーなら、日本語が読めなくても、どこに番号が書かれているか、平成表記の年号は西暦では？等を知っていてレンタカーを借りるのに問題がないこともありますが、パトカーに止めさせられた時は、読めない言語で書かれた免許を確認するために「本署まで連行」ということになりかねませんから要注意です。

さてレンタカーの話に戻ります。予約をするには先ず車種を決めねばなりません。予約の際には厳密な車種ではなく、車の大きさのグループを指定します。僕は昔からFull sizeを指定して予約をするのですが、数十年前にはFull sizeは日本では持てあますほどの大きさの自動車を指していました。それが、徐々に小型化して今ではハーツでFull sizeと言えば、トヨタカムリ、日産アルティマ(日本の日産ティアナに類似)、シボレーMalibu等、どれも一般には中型に分類されるもので、昔のFull sizeのイメージは全くありません。また、最近は韓国の現代やKiaの同程度のモデルが加わりました。

これらの車種は販売の際も互いに競争相手となっているはずですが、サンフランシスコ空港からメッドフォードの自宅まではちょうど600kmあります。燃料を満タンでサンフランシスコを出発すると、いずれの車種でも途中で給油することなく完走できるのですが、その燃費は結構大きく異なります。日本車は燃費が良いから米国でも売れているということになっていました。これらの3車種で最も燃費の良いのは、意外や意外、シボレーのMalibuなのです。それに日産アルティマが続き、そこから大きく離れてトヨタカムリとなります。トヨタカムリだけが確かV6で、他は4気筒と記憶していますので、その違いがこの結果をもたらす大きな理由なのでしょう。

サンフランシスコ空港のハーツで表示された番号のところ、最も燃費の良いシボレーのMalibuが待っていてくれると、ホッとします。それにもうひとつの理由があります。1970年代にサンフランシスコに在住していた頃、シボレーMalibuに乗っていたことがありました。その頃はエンジンが6リッターのV8を積んだ大きな大きな自動車だったのに今や2.5リッター4気筒の中型車。燃費の良さだけでなく、Malibuというだけで若い頃と重なり懐かしい気もするのです。

シボレー・マリブの変遷



初代(1964-1967)



3代目(1973-1977)



6代目(2004-2007)



9代目(2016-)